



おくすり通信

No. 28 骨粗鬆症治療の皮下注射

こんにちは、薬剤科です。これまでに様々な骨粗鬆症の治療薬についてご紹介しましたが、今月は骨粗鬆症の治療で用いられる皮下注射について説明します。

《副甲状腺ホルモン製剤「テリパラチド」》

副甲状腺ホルモンである「テリパラチド」は間欠投与（一定期間おいて投与する方法）することによって、骨形成を促進する作用があります。以前に説明したビスホスホネート製剤よりも、骨密度を増加させる作用が強く、椎体骨折の予防効果に注目されています。投与間隔が製剤により異なりますが、投与期間は2年までになっています。現在製剤化されている皮下注射を以下に示します。

- ・フォルテオ皮下注→1日1回毎日皮下注する。
- ・テリボン皮下注→1週間に1回医療機関で実施する製剤と、1週間に2回自分で皮下注できる製剤がある。

《抗RANKLモノクローナル抗体製剤「デノスマブ」》

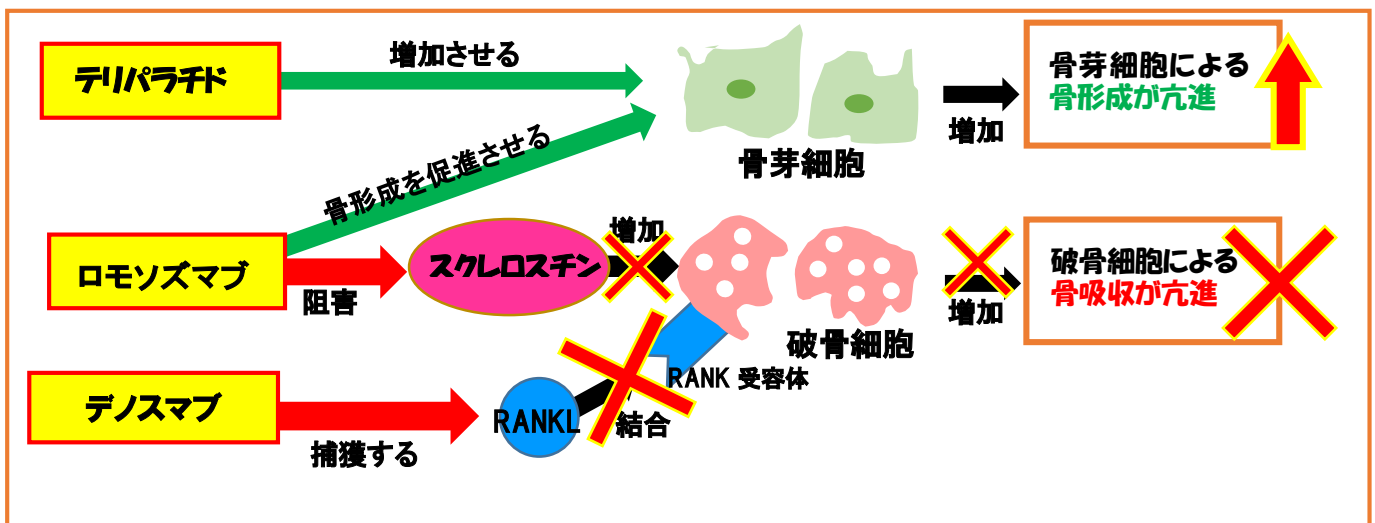
骨を壊す「破骨細胞」にはRANK受容体が存在し、「RANKL」という物質が結合すると破骨細胞が増殖します。このRANKLに対する抗体が「デノスマブ」と呼ばれるお薬で、受容体に結合する前にRANKLを捕獲し、破骨細胞の増加を抑制してくれます。強力な骨吸収抑制作用と持続的な骨密度の増加作用から骨折予防に期待できます。

- ・プラリア皮下注→6ヶ月に1回医療機関で皮下注射する。

《抗スクレロスチンモノクローナル抗体製剤「ロモソズマブ」》

「スクレロスチン」とは破骨細胞を増加させるタンパク質の一つです。このスクレロスチンに結合する抗体薬が「ロモソズマブ」で、骨形成の促進と骨吸収の抑制、両方の作用を持ち合わせたお薬になります。

- ・イベニティ皮下注→1ヶ月に1回医療機関で実施する。（12ヶ月継続する）



そのほか気になる点がございましたら、お気軽にご相談ください。